

【特集】

安田女子大学における共通教育外国語科目の改革について

松岡博信（安田女子大学 現代ビジネス学部）

1. 本学の外国語教育改革の背景と経緯

平成 17 年度末時点において、安田女子大学は、文学部・現代ビジネス学部・家政学部の 3 学部 7 学科に加え、文学研究科および教育学研究科博士課程後期まで有する女子のみ（大学院を除く）の総合大学であり、平成 16 年度の学生総数は約 3,500 名（短期大学 2 学科を含む）である。

安田女子大学の共通教育外国語科目は、平成 14 年度に大幅に改編され、平成 15 年 4 月から新しい体制とカリキュラムによる授業が開始された。それまでは、各学科で取得すべき外国語科目が指定されていたため、学生がそれらを主体的に選ぶことはできなかったが、共通教育の理念に則って、つまり専門教育のためではなく、教養のための外国語教育を目指して、全学科の学生が自由に外国語科目の組み合わせを選んで履修できるシステムに変更した。以下に現状と今後の課題を述べる。

2. 教養科目と基礎科目

本学の共通教育は、教養科目（平成 14 年度までは「人間系科目」と呼ばれていた講義科目）のみで構成した試行的期間（3 年）を経て、上述したように平成 15 度から基礎科目（演習・実技科目である情報処理科目、健康スポーツ科目、外国語科目）を加えて本格的に始まった。まずは、共通教育基礎科目である英語科目の現状を、共通教育外国語科目全体との関わりにおいて論じる。

共通教育科目の中の基礎科目は、現代的職業人として求められる基本技能の習得を目指すものであり、その中で、外国語科目は外国語を学習することを通して、その言語および文化に対する理解を深め、かつその言語によるコミュニケーション能力を養うことにあり、6 単位を卒業必修とする。以下にその構成科目と履修セメスターを示す。

(1)英語

英語リーディングⅠ(1 年前期)・英語リーディングⅡ(1 年後期)

英語ライティングⅠ(1年前期)・英語ライティングⅡ(1年後期)
英語コミュニケーションⅠ(2年前期)・英語コミュニケーションⅡ(2年後期)
英語コミュニケーションⅢ(3年前期)・英語コミュニケーションⅣ(3年後期)

(2)ドイツ語

ドイツ語Ⅰ(1年前期)・ドイツ語Ⅱ(1年後期)

(3)フランス語

フランス語Ⅰ(1年前期)・フランス語Ⅱ(1年後期)
フランス語コミュニケーションⅠ(2年前期)・フランス語コミュニケーションⅡ(2年後期)

(4)中国語

中国語Ⅰ(1年前期)・中国語Ⅱ(1年後期)
中国語コミュニケーションⅠ(2年前期)・中国語コミュニケーションⅡ(2年後期)
中国語コミュニケーションⅢ(3年前期)・中国語コミュニケーションⅣ(3年後期)

(5)海外文化語学演習

アメリカ文化語学演習(全学年対象・夏期と冬期の集中)
イギリス文化語学演習(全学年対象・夏期の集中)
ニュージーランド文化語学演習(全学年対象・冬期の集中)
中国文化語学演習(全学年対象・夏期の集中)

次に、英語関係学科の運営について述べる。英語以外の初習外国語（フランス語、ドイツ語、中国語の各科目）では、教材および授業方法は担当教員に一任されており、ここでは割愛する。

3. クラス編成およびクラス分けテスト

すべての外国語科目は、学科の枠を超えた混合編成であるが、新設学科である現代ビジネス学部現代ビジネス学科、家政学部生活デザイン学科・管理栄養学科および改編された心理学科の場合は、担当教員が申請の段階であらかじめ決定している関係で単一学科の学生を対象に開講される場合もある。

外国語科目の中で、英語関係の科目だけが全クラスを英語習熟度によって編成している。習熟度のレベルは、現在のところはすべての科目において2段階であり、発展1クラスに対して標準2クラスという学生数の比率となっている。

クラス分けテストは、「英語リーディングⅠ・Ⅱ」・「英語ライティングⅠ・Ⅱ」（1年前・後期）については入学直後に、そして「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」（2年前・後期）は、開講される前の年度が終了する直前に、さらに「英語コミュニケーションⅢ・Ⅳ」（3年前・

後期)は開講される学年の前期開始直後に実施される。

「英語リーディングⅠ・Ⅱ」と「英語ライティングⅠ・Ⅱ」のクラス分けテストは、主に語彙・文法・読解力を測定する共通問題であり、したがって同時に実施される。作成は本学の日本人英語教員であり、平成16年4月の受験者は約700名であった。

「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」のクラス分けテストは、初年度は主に聴解力を測定するものであったが、次年度、すなわち平成16年度末に行われたものは、語彙力・文法力・読解力を問うものであった。作成は本学の外国人専任教員による。平成17年1月の受験者は約600名であった。クラス分けテストはカードリーダーによって即日採点を行い、一両日以内には掲示板によって学生の所属クラスを発表している。

4. 自作教材および共通テキスト

「英語ライティングⅠ・Ⅱ」のテキストは、本学の英語教員が共同で著し出版したものを使用している。ユニット数は22、問題数は440問である。このテキストはCALL教室かコンピュータ教室を使用し、本学教員が制作した「サッと英作!」という自動英作文添削プログラムを用いて学習することに特色がある。したがって、学生数がある程度多くても、コンピュータが考えられうる多様な別解に対応して添削するので、一回の授業内で、多くの「並べ替え」・「和文英訳」問題を学生全員が集中的に学習することが可能である。

「英語リーディングⅠ・Ⅱ」のテキストについては、前年度末に担当予定の専任・非常勤教員全員に対して、リスニング演習を含むテキストを推薦してもらい、候補となったテキストを回覧した後の投票によって、標準用と発展用(今年度は各1冊。初年度は各2冊)を選定している。今年度は約15冊の候補が挙がり、そのうち2冊を採用した。

「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」のテキストについても、同様に外国人英語教師の間での協議によって選定している。

5. 授業方法および形態の統一化

授業形態についても、できるだけ統一化している。「英語リーディングⅠ・Ⅱ」および「英語ライティングⅠ・Ⅱ」は、毎時間TOEIC単語帳による単語テストを実施している。ただし、その問題作成と採点方法は各教員に任せている。

「英語ライティングⅠ・Ⅱ」は、前述したように「サッと英作!」という自動英作文添削プログラムを使用するために、全授業で情報教室かCALL教室を使用する。テキスト消化の

進度や小テストの回数なども全教員間で統一している。ここでも単語テストは毎回実施している。

「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」も、外国人英語教師同士間および共通教育部との連携を深め、できるだけ授業方法を統一している。

6. 課題と今後の展望

改編された共通教育外国語科目が始まって2年が経過した。以下にその課題と今後の展望を記す。

(1) 習熟度レベルの設定

学生の心情に対する配慮のために、発展1クラスと標準2クラスという比率にしたが、それぞれのクラス内においてやはりかなりの学力差が残る。習熟度別クラス分けの方法も、テストだけにすべきか、学生の希望も入れるべきかなど、今後も協議・検討を重ねたい。

(2) クラス分けテスト

新入生に対するガイダンス日程に余裕がなく、最初の英語の授業に間に合うようにクラス分けテストを実施すると、選択について十分考える暇もないままに受験し、直後に取り下げる学生が平成16年度前期は十数名出ている。主に、履修外国語を中国語に変更したい日本文学科の学生たちである。クラス分けテストが実施される入学時点より前の春休み中に、外国語履修に関わる説明資料を送付し、外国語履修に関して考える時間を十分に学生に与える必要がある。実際、17年度入学生に対してはそのようにする予定である。

さらに、クラス分けテストの妥当性・信頼性について吟味することも重要である。年ごとに問題改良を積み重ねることも忘れてはならない。

(3) 入れ替えテスト

「英語リーディングⅠ・Ⅱ」については、初年度は前期末に2度目のクラス分けテストを実施した。しかし結果的に、発展クラス在籍者の平均学力を越える数名を標準クラスから発展クラスに移動したに留まった。しかも、互いに慣れ親しんだ生徒や仲間との別れを残念に思う教員・学生も多く、2年目である平成16度は前期と後期の狭間での入れ替えを行わなかった。この変更により、同じテキストを通年で用いることができるようになり、か

つ移動する学生に後期用に別のテキストを購入させる必要もなくなった。

(4)テキスト選定の方法

多くの教員の協力で共通テキストを審査し採用しても、実際に授業で使ってみると様々な不満点が明らかになる。選択の基準や方法についてさらに検討を重ね、より適切な選定システムを確立する必要がある。

7. おわりに

まだ実施されて2年しか経ていない安田女子大学の新しい共通教育基礎科目外国語カリキュラムであるが、現在までのところ大きな問題もなく、3年目に向けて概ね順調に推移している。

英語以外の初習外国語についての習熟度別編成および統一テキストの使用などは、今後の履修者の様子を観察しながら考慮していきたい。また英語科目の習熟度別クラス分け方法に関しては、一定期間の実践を経たのちに、その効果や方法の妥当性などを詳しく検証し再評価する必要がある。

習熟度別クラス編成・統一授業形態の利点を最大限に引き上げることができる共通教育英語カリキュラムの構築に向けて、今後も教師間の密接な協力体制に基づいた努力と研鑽を重ねて行きたい。